

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第4話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ（30）：ラフドナ騎士団長

チビイ：ルチェリールタの相棒魔族

シャーザベスラ：ヌノの皇女

シャーニューニダ：魔族

ニコポレルク（40）：プリマダンケ

騎士団長

ニコポレリン（38）：ニコポレルクの妹

ニユンリン：魔族

ゾール：ニユンリンの父

ライネ：ニユンリンの母

嵐宮芽里：夕杜の王女

嵐宮芽亜（44）：夕杜の女王

○宿屋前（朝）

2人と1匹、作戦会議中。

シャーニューニダ「どうする。まともにやりあっても勝ち目ないぞ」

※ ※ ※

（フラッシュ）

ルチェリールタ、ニュンリンに迫られてドキドキして照れる。

※ ※ ※

シャーザベス「ルチェリールタでさえ、初対面で魅了させられてた。つまり、ルチェリールタをも魅了しうる力があるってことだ」

シャーニューニダ「それか、あいつは魅了魔法の耐性がなかった」

チビィ「どっちにしろ相当やっかいじゃないか……」

しばらく考えていたが、案が浮かばない。

そんな2人と1匹に近づいてくるニコ

ポレルク（40）と騎士たち。

ニコポレルク「お前たち、さつきから話を聞いていたのだが……ニユンリンを討伐しようとしているのか？」

シャーザベスラ「ああ。僕たちの仲間がニユンリンに捕らえられてしまっただけ。なんとかして助け出したいんだ」

ニコポレルク「ちょうどよかった。俺たちに協力してほしい。俺の名前はニコポレルク、プリマダンケ騎士団の団長だ」

シャーザベスラ「よろしく。僕はシャーザベスラ」

ニコポレルク「魔法王国ヌノの皇女！？　こ、これは失礼いたしました！　こんなところにいて大丈夫なのですか？」

ニコポレルク、目を見開いて驚く。騎士たち、ざわざわする。

シャーザベスラ「気にしないで、むしろ旅をして他の王の子に会わなきゃいけないんだ」
ニコポレルク「さつき、ルチェリールタが攫

われたと言っていましたか？」

シャーザベスラ「そうだ」

騎士たちに緊張が走る。

シャーザベスラ「だから、君たちにも協力してほしいけど……こっちのシャーニューニダの攻撃でさえ効かなかったんだ。こいつはルチェリールタより強い」

と、シャーニューニダを指して言う。

ニコポレルク「な……そ、それは手ごわいですね。ですが……あいつだけは、あの鬼畜だけは！ この手で……この手で葬らなければ！ あいつは、俺の妹を！」

ニコポレルク、拳を握る。

○（回想）ニコポレルク宅・居間

ニコポレリン「お兄！」

と、笑顔でニコポレルクを呼ぶ。

ニコポレリン「できた！」

作った料理をニコポレルクに見せる。

ニコポレルク、それを口に運ぶ。

ニコポレルク「うま！ 前のゲテモノから見
違える成長じゃないか！」

ニコポレリン「お兄！ ゲテモノは余計！」
ニコポレルク「ははっ、まあいいじゃないか」

2人の間に流れる、ほんわかとした雰
囲気。

○街・広場

男A「どうする！？ ニュンリンが来るのは
もう明日だ！」

女A「どうすればいいの！？」

恐怖で騒いだりしているたくさんの人
々。

それを心配そうに見つめるニコポレル
クとニコポレリン。

○同・広場

翌日。街の人々がニュンリンによつて
集められている。

ニュンリン「さあ、今回の生贄をよこしなさ

い」

ニユンリン、人々を睨む。

男 B 「ほら、行け」

男 C 「行くんだ」

男 D 「さあ」

女の子「いやあっ！ いや！」

男たちに引っ張られる女の子。

ニコポレルク「待て！ 俺を生贄にしろ！」

ニコポレルク、ニユンリンに叫ぶ。

振り向く人々。

ニユンリン「そう。健気ねえ。なら、あんたを代わりに生贄にしてあげる」

ニコポレルク「はあっ！」

ニコポレルク、魔法を発動。

煙が晴れる。ニユンリン無傷。

ニユンリン「無駄なのに」

ニユンリンの蜘蛛の足が伸びる。

ニコポレルクに刺さる。

ニコポレルク「ニコポレルク！」

（回想終わり）

○宿屋前・朝

ニコポレルク「妹が帰ってきた時には、生気をなくしていたんだ」

シャーザベスラ「死んだんじゃないんだね。」

「っていうか返されたの？」

ニコポレルク「はい。でも、妹はずっとぼーっとするようになりました。生活はできていますが、もう妹は帰ってこない……ニュンリンを倒したとしても」

シャーザベスラ「まあその話を聞く限り、帰って来たからいいってわけでもないからね」

ニコポレルク「はい。というわけで、協力してくださいますか？」

シャーザベスラ「もちろんさ」

シャーザベスラ、ニコポレルクと握手を交わす。

○神依学園

T「神依学園」

シスターや神父の服を着た生徒たちが、
外の広場で本を開いて教師の授業を受
けている。

○同・校長室

生徒の成績を資料に書き込んでいる嵐

宮芽里と嵐宮芽里（４４）。

芽里「お母様」

芽里、手を止める。

芽里「何？」

芽里「来たかも……」

芽里「ゲドン族のこと？」

芽里「そうじゃなくて、シャーザベスラが。

シャーザベスラの魔法を感じた」

芽里「……まさか、もうそこまで危機が迫っ

てるってこと？」

芽里「キセ……」

芽里、口をきゅつと閉じて難しい顔に
なる。

○ニユンリンの住処・大部屋

ルチェリールタ、未だ縛られたまま。

ルチェリールタ「ニユンリンく。あいつら邪

魔だし……殺しにいかない？」

ニユンリンM「もう完全に堕ちてるね。あー

しとルチェリールタの2人いれば余裕……」

ニユンリン「そうしょっか」

ニユンリン、口角をあげてニヤリと笑

う。

ルチェリールタ「わたしあいつらと一緒にい

るから、弱点もちよつとは知ってるんだ。

そのままじゃ勝てるか怖いから、防御糸半

分くれる？」

ニユンリンM「半分……ちよつと怖い。あー

しの戦闘能力で勝てるか不安……魅了を使

えばいけそうだけど、憎しみが強すぎると

効果がない。魅了失敗した時が怖い」

ニユンリン、考える素振りを見せる。

※ ※ ※

(フラッシュ)

ニユンリン、シャーザベスラとシャー

ニューニダの攻撃を防ぐ。

※ ※ ※

ニユンリンM「あいつらの攻撃は強かった。

実力者だろうから、あーしの毒攻撃も当たるかどうか……なら。防御を失うのは怖いけど……」

ニユンリン「怖いから、本当に半分ね。あと、これもあげる。魔力増強剤。これ貴重なんだよ？」

ルチェリールタ「えへへ……」

ルチェリールタ、瓶をもらう、中の魔力増強剤をぐいっと飲み干す。

ルチェリールタ「ねえニユンリン。なんでこんなことしてるのか教えてよ」

ニユンリン「なんで？」

ルチェリールタ「だってわたし、ニユンリンの味方だもん」

ニユンリン「そうだね」

○夕杜王国・街道

向かい合うニユンリン（人間態）たち
とシャーザベスラたち。

チビィ、少し遠くでプリマダンケ騎士
数人と待機。

シャーザベスラ「ニユンリン！ ルチェリー
ルタを返してもらう！」

ニコポレルク「その悪行、死をもって償わせ
てやる！」

シャーザベスラ、水の鯨ロンリーシャ
ークを召喚。ニコポレルクとプリマダ
ンケ騎士、剣を構える。

ニユンリン「ルチェリールタ」
ルチェリールタ「おっけ」

ルチェリールタ、ニユンリンをかばう
ように前に出る。

シャーニューニダ「完全に魅了されてしまっ
たか。我らは魅了を解除する方法を知らな
い。ならば方法はひとつ……殺す」

シャーニューニダ、ルチェリールタを

睨む。

シャーザベスラ「おい、何言ってるんだ？助
け」

ニコポレルク「（叫ぶ）ニュンリンの味方な
らば殺す！」

シャーザベスラの言葉が遮られる。

シャーザベスラ「おい！ 手加減しろよ！？」

シャーニューニダ「手加減して勝てる相手で
はない！」

シャーザベスラ「ああつ、もう！」

戦闘開始。

シャーニューニダ、殴る。ルチェリー
ルタ、防御。

爆音が響き渡る。ルチェリールタ無傷。

シャーニューニダ「何！？ お前……そうか、
ニュンリンに何かされたな！ ドーピング
か！」

ニコポレルク「覚悟！」

ニコポレルク、ルチェリールタに剣を
振るう。ルチェリールタ、風魔法でニ

コポレルクを吹っ飛ばす。

ルチェリールタ「はあっ！」

ルチェリールタ、拘束魔法を発動。相手が全員拘束される。

相手全員がルチェリールタを睨む。脱出を試みるも、

ルチェリールタ「ニュンリン。とどめ」

ニュンリン「任せて。絶対離さないでね」

ニュンリン、ニヤリと笑う。魔族態に変化。

ニュンリン「みんな死んで。ルチェリールタ意外じゃない……特にそっちの魔族。なんかトラウマ思い出して嫌な感じがするんだよね」

と、シャーニューニダを見る。

手をかざすと、まがまがしい毒が出現。相手に向かって発射される。

ルチェリールタ、かっと目を見開く。さっと移動し、ニュンリンの毒を受ける。

ルチェリールタ「ぐっあ……」

その光景に、その場の全員が驚いたような表情になる。

ルチェリールタ「ぐあああああ！」

地面に倒れ、苦しむ。拘束魔法が解ける。

数秒後、しんどそうに立ち上がる。

ニユンリン「なっ、なにが起こって！？ ル

チェリールタ？ 何してんの？ ……まさ

か、最初から魅了にかかってなかったの？

しまった！ 糸と増強剤をもらったのは

あーしを確実に殺すため……」

ルチェリールタ「ニユンリン。もう、いいで

しょ……ぐうううう」

ルチェリールタ、治癒魔法を発動させ

ながら唸る。呼吸が荒くなる。

シャーニューニダ「今だ！」

一斉攻撃。

ルチェリールタ、それを迎えうつ。防ぎきれず、倒れる。

シャーニューニダ「は？ 何をしている、ど
け」

ルチェリールタ「嫌だ……！ はあっ」

と、息を切らす。

シャーニューニダ「我らの脅威になるなら、
殺す」

ルチェリールタ「待って……聞いて……ニ
ンリンは、ニンリンは……」

シャーニューニダ、魔法発射準備。

シャーザベスラ「待てシャーニューニダ！

何かある！ 待つんだ！」

シャーニューニダ「ちっ」

シャーニューニダ、魔法解除。

ルチェリールタ「ニンリンが人をさらって
たのは、わけがあるの……ニンリン。助
かりたかったら、今のうちに全部正直に話
して」

と、息が荒いながらもニンリンに話
しかける。

ニンリン「くっ」

○（回想）ニュンリンの住処・大部屋（夜）

T「約500年前」

ニュンリン「パパ！ ママ！」

まだ幼いニュンリン、ライネとゾール
に抱っこされてにこにこする。

ライネ「本当に甘えん坊ね、ニュンリン」

ニュンリン「えへへ、いいもん！」

ゾール「はは、そうか」

○同・大部屋（朝）

ニュンリン「あそんで！」

ライネ「いいよ。おいで」

しばらく遊ぶ。

ニュンリン「えへ、えへへ……」

ゾール「あ、そうだ。今日はニュンリンに、
一族のことを見てもらおうと思う」

ゾール、ニュンリンを抱っこして部屋
を出る。

ライネ「いってらっしゃい」

○洞窟・内部広場（朝）

蜘蛛魔族たちが集まっている。

繭にした人間からエキスを吸い取っている。
いる。

ゾール「これが、一族の活動だ。捕まえた人間からエキスを搾り取って、俺たちの餌や取引の交渉材料にしているんだ。ニュンリンも、いつかこの仕事をやってもらふことになる」

ニュンリン「……」

ニュンリン、震えている。

ニュンリン「パパ、怖いよ……」

ゾール「そうか……ニュンリンは混血だから、蜘蛛一族の残虐な性格が遺伝しなかったんだ」

○ニュンリンの住処・大部屋

ニュンリンとゾール、帰宅。

ライネ「どうだった？」

ゾール、首を横に振る。

ゾール「ニュンリンには無理だ。俺の残虐な性格が遺伝してない底抜けに優しい性格だから、一族の活動を見て怖がってた」

ライネ「そう……確かにね」

ニュンリン「ねえパパ、みんなが怖いのでみんなとなかよくなりたいの」

ニュンリン、ゾールを見つめる。

ライネ「ニュンリン……！」

ライネとゾール、涙を流しながらニュンリンを抱きしめる。

○遺跡地下・最奥

とても広い空間に、多種多様、多数の魔族が集められている。あちこちから、疑問の声上がる。

ニュンリン「魔族集会ってなに？」

ゾール「魔族のリーダーが、招集をかけたんだ、この地域の魔族が集められてる」

ライネ「お偉いさんみたいだから集まってる

の。ニュンリン、何かあったら守ってあげるからね」

ニュンリン「……うん」

ニュンリン、頷く。

しばらく時間が経過。リーダー、姿をあらわす。

リーダー「お集まりいただき、心から感謝する！ 今日集まってもらったのは他でもない、皆に見てもらいたい物があるからだ！」

リーダー、上に向かって両手をかざす。

上から、30メートルの巨人がふつてくる。着地し、地面が大きく振動。

巨人はまがまがしい気配を放っている。

ニュンリン「……なにこれ」

ゾール「気をつけるニュンリン」

巨人の髪が何方向にも伸び、魔族に刺さる。

魔族「……うわああああああっ！」

魔族たち、その場から逃げ出す。

リーダー「ふ、はははははははは！ あーは

[illegible]

○ 同
• 通路

逃げ惑う魔族たち。それを追う髪の毛。

何体も、髪に刺されて精気を吸い取られる。

ニ
ユ
ン
リ
ン
「あ
つ
！」

ニュンリン、こける。目の前に髪の毛が迫る。

ゾー・ル・ライネ「ニュンリン！」

2人、ニュンリンをかばって髪の毛に刺される。

ニ
ユ
ン
リ
ン
「
パ
パ
！
マ
マ
！
」

「ゾールにげろ……」

ライネ「生きて……」

ニ
ユ
ン
リ
ン 「い、いやあああああああああ

あああああ！」

○遺跡・内部

ニ
ユ
ン
リ
ン、
必
死
に
逃
げ
る。

○ニユンリンの住処・大部屋

ニユンリン「う、うああああ」

ニユンリン、泣く。

心が黒くゆがむ。

（回想終わり）

○夕杜王国・街道

ニユンリン「これで全部」

ルチェリールタ「……わたしが聞いた内容と

同じ」

安全になり、続々と人が集まってくる。

ニコポレルク「だからなんだ！」

ルチェリールタ「ニユンリンは仕方なかった

！　パパとママを殺されたから、心がゆが

んじやって！」

ニユンリン「ねえ。最初から演技で、このた

めに……あーしを助けるためにわざわざこ

んなことを？　なんでこんなあーしを助け

ようと？」

ルチェリールタ「ニュンリン、わたしに助けてって言うたでしょ。可哀想で、見捨てられなかった。死ぬのが怖いから、人間から精気を吸い取って糸に変えてたんでしょ。糸が防御に全振りなのはすぐ気づいたよ」

ニュンリン「ルチェリールタ……」

ルチェリールタ「わたしが本当にやりたいのは、誰かを殺すことじゃない。苦しむ人を減らすこと。だから……ニュンリンを助けて改心させたかった……」

ニュンリン「……！」

ニュンリン、戦意喪失し人間態に戻る。

地面に膝をつく。

ニュンリン「あ、あーしは取り返しのつかないことを……大事な人をなくす苦しみを知ってたのに……」

ニュンリン、顔に涙を浮かべる。

ニュンリン「ごめんなさい。ごめんなさい……」

……！

民衆「知るか！」

民衆から声がする。

民衆「死ね！」

民衆「そうだそうだ！」

ニユンリンに石が投げられる。

ニコポレルク「俺が殺す」

と、ニユンリンに剣を向ける。

ルチェリールタM「(悲しそうな顔で) まず

い！ ど、毒で動けない！ 嫌だ、死なな

いで…もう何も失いたくない…」

ニコポレルク「死ね！」

ニコポレルクが叫ぶと同時に、傍に雷が
落ちる。

一同「！？」

屋根の上に芽里がたたずんでいる。

芽里、宙を歩いてゆつくりと降りてく
る。

芽里「ニユンリンを殺したら、ルチェリール
タさんの心が崩壊してしまいますよ…」